

極地研 NEWS

no. **192**
Dec.2009

CONTENTS

極地研TOPICS 2

新「しらせ」による第51次隊からの輸送方式

21世紀の南極生物学 ―国際極年からの飛躍―
第10回SCAR国際生物シンポジウムの開催

国立極地研究所の一般公開を開催

「第6回中高生南極北極科学コンテスト」と
「中高生南極北極ジュニアフォーラム2009」の実施

ワークショップ 6

2009年南極医学医療ワークショップ

第29回極域地学シンポジウム

日豪ワークショップ開催報告

観測隊だより 7

昭和基地から

第50次南極地域観測隊（越冬隊員）
のご家族懇談会

極地研カレンダー

お知らせ 8

人事異動

近刊紹介

広報室から

総合研究大学院大学・
極域科学専攻コーナー



国立極地研究所
大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構

勇躍初出航する4代目観測船「しらせ」



発行日/平成21年12月15日

編集発行/大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立極地研究所
〒190-8518 東京都立川市緑町10-3 電話:042-512-0655 FAX:042-528-3105
ホームページ:<http://www.nipr.ac.jp/>

新「しらせ」による 第51次隊からの輸送方式

石沢賢二

南極観測センター・設営担当マネージャー



新「しらせ」と輸送のコンテナ化

船体のオレンジ色も同じ、大きさもほぼ同等なので、外見上は旧「しらせ」との違いがよくわからないが、新船の露天甲板中央部には、56個の小型コンテナが搭載される。煙突が2分割されていることと、このコンテナが外見上の最も大きな違いである。「しらせ」内部に目を転じると、観測隊用の大きな冷凍・冷蔵・冷房庫は存在しない。40トンもの重量を占める越冬隊食料品のうち、冷凍品・冷蔵品は、冷凍コンテナ8台で南極に運ばれる。コンテナ化の利点は、船への荷積み・荷下ろし、基地への配送が格段に簡便化されることである。第49次隊では

7,300個もあった貨物数が第51次隊では3,100個に減った。東京での貨物の搭載も時間短縮が見込まれることから、通常より4日早い出港が実現した。しかし、デメリットは、コンテナ自重の増加である。56個のコンテナだけで、約100トンである。

使用するコンテナと荷役設備

ISO（国際標準化機構）規格のコンテナには、40、30、20、10フィートがある。今回使用するのは、これとは別で、国内の鉄道貨物で従来から多く使われてきた12フィート（長さ3.6m）である。当初は20フィートコンテナの使用を検討した。しかし、昭和基地近くの海水に砕氷船が

接岸した後の雪上車と橇による氷上輸送、陸上への荷揚げ、トラックでの陸上輸送などを考慮してこのコンテナを採用した。昭和基地周辺の海水の状況では、大型コンテナの運用には向かない。

接岸地点から荷揚げ地点までの約1kmの区間は、橇の上にコンテナを載せて雪上車で牽引する。夏期の海水の厚さは、1m以上あれば問題ない。氷厚や牽引力を考慮し、コンテナ総重量を6.5トンに制限している。新たに造成した上陸点には、自重14トンの大型フォークリフトが待機して橇からトラックにコンテナを載せ替える。約500m離れたコンテナヤードにいったん仮置きした後、必要な部材を現場に配送する。

コンテナ輸送を計画した段階から実施した受け入れ態勢は以下の通り。基地中心部までの道路の新設・整備、コンテナヤードの造成、ヘリポートおよびヘリポート待機小屋の新設などである。

12フィートコンテナの他にも、ヘリコプター輸送用の小型コンテナ366個、ドラム缶4本積みパレット124台、燃料用リキッドコンテナ40個、ヘリウムガスカードル60台（360本分）を後部船倉に搭載できるように計画した。定型品はできるだけコンテナ類に納めて船倉での貨物固定作業を軽減する。建築資材などコンテナに収まらない物資は前部船倉に雪上車やトラックと共に積み付ける。



コンテナを5段積み搭載した「しらせ」



コンテナ橇を氷上輸送する雪上車



コンテナヤードから12フィートコンテナを載せ東京港に向かうトラック

国内での関連施設

立川の国立極地研究所の極地観測棟1階には、床面積1,809m²の大きな輸送用作業スペースがあり、物資集積・梱包作業ができる。最大荷重11.5トン、2.5トンおよび1.5トンのフォークリフトが各1台ずつ配備してある。また、屋外には、コンクリート床のコンテナヤード（2,446m²）がある。

21世紀の南極生物学 ―国際極年からの飛躍―

第10回 SCAR 国際生物シンポジウムの開催



福地光男
生物圏研究グループ・教授

南極研究科学委員会（SCAR）と国立極地研究所の共催で、第10回SCAR国際生物シンポジウムが、2009年7月26～31日に北海道大学学術交流会館にて開催された。第1回目が1962年に開催されて以来、ほぼ4年毎にSCAR加盟国の持ち回りで開催されてきたが、国内での開催は初めてであり、もちろんアジア地域でも初めての開催であった。第10回目の開催が国際極年と重なったことにより、シンポジウムのメインタイトルは国際地球観測年から50年目にして、今後の50年先を見通すことを意図して決定した。

多岐にわたる研究発表

第10回は、標記メインテーマの下で6つのサブテーマが設けられ、基調講演に続き、口頭発表やポスター発表が続くスタイルで運営された。

サブテーマは、①南極における生物進化の歴史、②極限環境への適応、③海洋生物の多様性とその過程、④陸域システムのパターンと多様性、⑤環境変動と人間の関わり、及び、⑥アウトリーチと次世代への教育、であった。6番目のテーマは、国際極年の重要な課題の1つであり、これまでのシンポジウムには見られなかったユニークなテーマであった。

国際極年におけるSCAR主導の大きなプログラムである「南大洋の海洋生命体マリンセンサス」研究計画に関する成果が目立ったが、SCAR生命科学委員会主導の「南極における進化と生物多様性」研究計画に関する発表も多かった。開会の基調講演では南極域のこれまでの環境変遷と今後予想される気候変動の中で、

この地域の生物多様性がどのように移り変わってきたかの研究の重要性が紹介された。

サブテーマの下では、新第三紀～更新世後期までの幾度かの氷床拡大期の間に南極の陸上生物がすべて絶滅したという従来の考えを覆すような発表、バクテリアにおける分子レベルでの低温適応機構、藻類における海水下の光環境への適応、オキアミにおける南極の冬期環境への適応、海鳥類における環境利用の行動的適応など、海洋生態系の長期変動、ペンギン類の繁殖率と気候変動の関係、更に、近年問題になっている南極海の海洋酸性化に対する様々な海洋生物への影響、南極域生態系と地球環境変動の関係など、多岐にわたる最新の研究内容が発表され、活発な討議が行われた。

アウトリーチ活動

一方、サブテーマ⑥については、札幌国際プラザと共催で、7月29日に昭和基

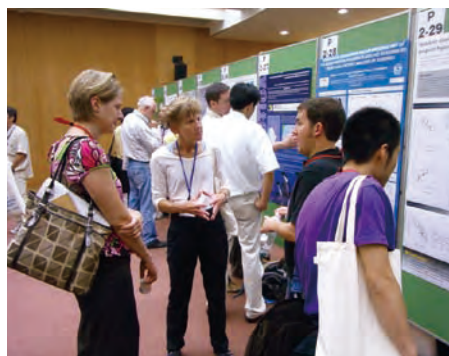


シンポジウム会場の北海道大学学術交流会館

地とのテレビ会議を組み合わせ公開市民講座「さっぽろに南極がやってくる！」を開催した。南極観測50周年事業のうちに昭和基地を初めて訪問した作家である立松和平氏の「南極で考えたこと」の講演や米と豪からの研究者による南極の海洋生物と地球規模環境変動との関わりを紹介する分かりやすい話が参加者に好評であった。

次世代へ向けて

本シンポジウムで初めての試みとして、若手賞を導入した。各サブテーマのコンピーナーによる評価を基にし、上位10名に、更に口頭とポスター発表毎に最高位の者に、前回シンポジウム開催委員長であったブラジルの故Edith Fanta女史にちなみ、Fanta賞とした。参加者数は26カ国から合計255名で、このうち大学院生や学位取得後もない若手研究者数は22カ国から91名であり、全体の4割を占めた。2010年8月のSCAR オープン・サイエンス・カンファレンス開催までに、本シンポジウムの発表論文を『Polar Science』誌の特集号に出版する。次回開催地はまだ未決定である。



ポスター発表会場



市民講座での発表

国立極地研究所の一般公開を開催



川久保 守
一般公開実行委員会委員長
広報室長

熱気溢れる各コーナー

情報・システム研究機構国立極地研究所の一般公開を、子どもたちの夏休みや、7月に予定されていた移転記念式典等を考慮して2009年8月29日に開催した。

5月に立川に移転して来て、初めての研究所の一般公開ということで、地元を含め周辺地域の住民の方の期待も大きく、当日は開場前から200人を超える列ができた。16時30分の入場終了までに3,450人の来場者があり、総合研究棟の

アトリウム、リフレッシュコーナー、会議室等及び極地観測棟や構内に開設した各催しものは、参加者で溢れた。

極地観測の研究成果や活動についてのポスターや標本、試料、剥製などの展示、南極観測隊のコーナー、研究分野ごとのサイエンスカフェの他、-50度の低温室に入るなど研究所の奥深く入る探検ツアーを各種実施した。本吉第51次南極観測隊長の講演や南極昭和基地と結んだライブトークには、多くの立ち見が出た。

反省と期待

教職員の総員が200人に満たない規模の組織では、これだけ多くの来場者の全ての要望に対応するのは難しく、一般公開の参加者からは、人員配置や特に探検ツアー等の少人数でのものには苦情も聞かれたが、約1,800通のアンケート回答には、「南極観測を身近に感じた」「興味深い展示で満足」「楽しかった」「もっと公開の回数を増やして」などの多くの応援メッセージが寄せられた。



スノーモービルに乗ろう



作って観察、光の分光



藤井所長と話をする子供達…するどい質問が…



なにが見えるか、顕微鏡観察



-50度の低温室へ探検ツアー

「第6回中高生南極北極科学コンテスト」と 「中高生南極北極ジュニアフォーラム2009」の実施

川久保 守

第6回中高生南極北極科学コンテスト実行委員長

広報室長

過去5年にわたり「中高生南極北極オープンフォーラム」として、中高生から南極や北極での研究提案を募集していたが、今年度から「中高生南極北極科学コンテスト」として実施することとした。また、コンテスト受賞者の表彰と、全ての提案者の発表の場として「中高生南極北極ジュニアフォーラム」を開催した。

第6回中高生南極北極科学コンテスト

2009年6月15日～9月10日の間、提案を公募したところ、128件（32校。内訳は中学校18校、高等学校14校）の応募があり、審査の結果、次の提案が受賞した。「南極科学賞」は、11月に日本を出発した第51次南極観測隊が南極で、また、「北極・南極科学賞」は、北極での観測グループと第51次南極観測隊がそれぞれ北極と南極で提案にある実験等を実施する。

南極科学賞：観測隊員の見る夢は？

提案者：松岡里咲

所属：大阪教育大学附属池田中学校

北極・南極科学賞：南極では日時計の影はどのような軌跡を描くか

提案者：PROJECT “SWUN”

南極グループ（代表：岩佐映美他9名）

所属：大多喜町立大多喜中学校

当初、コンテストでは「北極科学賞」を想定していたが、受賞に該当するもの

がなかったため、審査委員の協議により、「北極・南極科学賞」を新設して採択することとなった。この他に特別賞として9件の提案が採択された。惜しくも賞を逸した全提案に、審査委員からのコメントを付してその旨をお知らせした。

コンテストへの改称

これまでの「中高生南極北極オープンフォーラム」については、「国際極年2007－2008」の終了を機に、経過、実績等についてレビューし、以下となった。

①「中高生南極北極オープンフォーラム」は、中学生及び高校生から広くアイデアを公募し、審査の上、優秀と判断されたテーマを南極観測隊に託し、昭和基地で実際に行った結果を提案校にフィードバックするという、研究最前線（国立極地研究所）、南極・北極の現場（観測隊）、そして生徒と教員（教育現場）が連携した、おそらく他の研究機関ではほとんど例を見ないユニークなものであるといえる。

講演会、オープンキャンパスなどといった典型的なイベントの域を超え、青少年に極地への夢を抱かせ、さらに極域科学への興味と関心を植えつける意味で、社会的インパクトもそれなりに大きいものであったと思われる、今後も発展的な形で存続してゆく。

②事業の名称については、これまで「オー



フォーラムの会場風景

ンフォーラム」と称してきたが、フォーラム (Forum) とは本来「討論」の意であり、オープンフォーラムは「公開討論会」となる。本事業の目的は中高生による討論会を開催することではなく、提案のコンテストであることから、名称は「中高生南極北極科学コンテスト」として実施する。

中高生南極北極 ジュニアフォーラム2009

「第6回中高生南極北極科学コンテスト」での受賞者の表彰と応募者の提案の発表の場として、11月15日に国立極地研究所において「中高生南極北極ジュニアフォーラム2009」を開催した。受賞者や家族友人など約70名にあわせて、星合孝男審査委員長をはじめとする審査委員の方々、藤井所長ほか教職員、地元テレビ局や一般の方を加え約120名が参加した。受賞者の口頭発表が13件と昨年の9件を上回り、1人当たりの発表時間が若干少なくなったがいずれの発表もよくまとめられ、会場では活発な質疑応答が行われた。食事をとりながらの参加者の交流、南極昭和基地とのTV会議、国立極地研究所の探検ツアーなど参加した中高生にとって、南極、北極についての興味がよりかきたてられた1日であった。



コンテスト表彰式の様子

Work Shop

2009年南極医学医療 ワークショップ

8月22日、標記ワークショップを総合研究棟大会議室で開催した。中国、インド、韓国の南極観測に関わる医師4名を含め延べ50名余りの参加があり、23件の発表が夜19時近くまで熱心に行われた。

まず日中韓の基地やドームAでの基地建设に同行した医師から医療の現状報告があった。その後日本の南極医学研究、すなわち越冬隊員の心理研究、南極における皮膚の変化の研究、レジオネラ対策、高所医学的研究、および遠隔医療システム等に関する報告があり、各国の医師からも関連の研究等が紹介された。白石副所長からは近年増えている航空機等による緊急搬送の現状が報告された。ワークショップの間、TV会議システムにより昭和基地に映像が送られ、越冬中の2名の医師も遠隔医療相談の実施状況等の報告を行い、参加者の関心を集めていた。

第45次隊から継続している心理研究では、蓄積したデータと、帰国後の越冬隊員へのインタビューにより越冬隊員の心理変化について深みのある解析がなされ、帰国後の「社会復帰」の過程で国立極地研究所としてできる対応について興味深い提案があった。インドの医師からは今年の隊員死亡例に関して、ストレスから現地で始まった深酒、喫煙との関連が示唆された。来年は7月17日開催を予定。

(渡邊研太郎：生物圏研究グループ・教授)



昭和基地の医師からの報告

第29回 極域地学シンポジウム

10月8日、9日の2日間、標記シンポジウムが総合研究棟大会議室で開催された。発表は、口頭発表32件、ポスター発表25件、参加者は2日間で延べ150名であった。初日の8日は、台風18号の影響により、開始時間を10時半から13時に遅らせ、一部プログラム変更を行ったが、参加者のご協力により、2日間を通して無事すべての口頭発表が行われた。今回は「南極氷床・南大洋変動史の復元と地球環境変動システムの解明」、「極域から見た超大陸の形成と分裂のダイナミクス」および「測地・固体地球物理」の3つの大きなセッションテーマのもとに発表が行われた。

「極域から見た超大陸の形成と分裂のダイナミクス」では、第49次夏隊から継続されているセール・ロンダーネ山地地質調査から、特に第50次隊夏隊の調査結果が中心に示され、注目を集めた。その他に、リュツォ・ホルム湾沿岸地域、エンダビーランド、およびゴンドワナ大陸との関連からインドやアフリカ等の広域の岩石学、地球化学や年代学等の結果が示された。また、IPYに関連したアメリカとの共同地震探査や、南極域の深部地震波速度構造等の発表が行われた。「南極氷床・南大洋変動史の復元と地球環境変動システムの解明」では、海底堆積物を用いた古環境復元や、衛星やモデルによる氷河の消長に伴う地殻変動に関する研究等の発表が行われた。「測地・固体地球物理」では、地震のモデルや統計的手法による解析、地震新超伝導磁力計の設置計画、海底圧力計のデータ解析結果および南極大陸縁の大陸棚深度に関する研究等、多岐にわたる発表が行われた。今回のシンポジウムで北極域に関する発表は、アラスカの氷河の消長に伴う地殻

変動に関する研究1件だけであった。

全体を通して活発な議論が行われ、地学に関係する各研究分野の今後の進展が期待される。

(野木義史：地圏研究グループ・准教授)

日豪ワークショップ開催報告

9月9日～11日にかけて標記会合を開催した。これは、昨年6月に豪州のラッド首相が来日した際、共同宣言で気候変動に関する南極での共同研究をより推進することが表明され、共通の研究テーマを絞り込む目的で開かれたものである。海洋、高層大気、陸上生態、雪氷等の分野の研究者が豪州からは南極局を中心に11名、日本側は北大、海洋大、JAMSTEC、所内等から延べ30名余りが参加した。

研究グループ間の対話を深め、より高いレベルで共同研究に結びつけたいとの趣旨を確認し、第Ⅷ期南極観測計画の重点プロジェクトに含まれる海洋関係の計画を含め、事前に取りまとめた研究提案を元に意見交換を行った。9、10日の全体会合で、気候変動に伴う南極システムの応答予測の多くは西南極における研究に基づいており、それとは応答が異なる東南極に基地を持ち、海洋観測等調査の機会が多く、実績もある両国が共同で東南極の研究を進めることは極めて重要であることを確認した。

11日は海洋、高層大気、アイスコア研究グループに分かれて実務的な打合せを行った。海洋グループはJST-DIISR研究計画公募で採択された「東南極海システムにおける気候変動の影響評価に向けた基盤整備」計画について扱うデータ、ロードマップ等具体的な実施計画を策定した。

(渡邊研太郎：国際企画室・教授)



昭和基地から

7月 上旬は2日～7日まで連続して2回のA級ブリザード、中旬にも2回（A級とC級）のブリザードがあった。9日には5月31日からの極夜後、初めての太陽が視認され、その後徐々に明るい時間帯が長くなっていった。

31日に生鮮野菜のキャベツの在庫が終了した。第51次隊の活動開始に伴い、各部門調達参考意見の送付を開始した。

8月 月を通して雪の日が多く、16日～18日にA級、22日と26日にそれぞれC級の計3回のブリザードがあった。1日には今次隊最低気温の-38.5℃を記録した。日毎に明るい時間帯が長くなり野外活動が活発に行われた。6月に開講した南極大学を17日に閉講した。23日には衆議員選挙のFAXによる在外投票が行われ、国内で事前登録していた23人全員が投票した。また同日、国立極地研究所の「越冬隊家族懇談会」に出席した隊員の家族との間でTV交信を行った。

9月 明るい時間帯が長くなり晴れた日は日差しが眩しく、オゾンホールの発達期に入った。8～12日と26日～28日の2回A級ブリザードとなり基地内に大量の積雪が見られた。

雪上車や橇の点検整備、糧食（レーション）作りなど、10月からの内陸旅行に備えた準備作業が活発に行われた。

昭和基地 月別気象状況	2009年		
	7月	8月	9月
平均気温(℃)	-16.3	-20.0	-16.7
最高気温(℃)	-4.7(3日)	-5.9(18日)	-6.5(11日)
最低気温(℃)	-36.8(31日)	-38.5(1日)	-35.7(3日)
平均気圧・海面(hpa)	987.3	989.4	985.6
平均蒸気圧(hpa)	1.6	1.1	1.3
平均相対湿度(%)	73	71	68
平均風速(m/s)	8.8	6.6	7.2
最大風速・10分間平均(m/s)	37.7(3日)	36.1(17日)	33.8(11日)
最大瞬間風速(m/s)	48.0(3日)	46.5(17日)	40.6(11日)
平均雲量	7.1	7.5	7.4



第50次南極地域観測隊（越冬隊員）のご家族懇談会参加者の皆さん

観測・設営作業とも概ね順調に経過している。

第50次南極地域観測隊（越冬隊員）のご家族懇談会

現在越冬中である第50次越冬隊員のご家族懇談会が、8月23日（日）に情報・システム研究機構総合研究棟の大会議室で開催された。

このような越冬隊員のご家族による集まりは、第1次隊以来続けられてきたものであり、今回は、全国各地から合計22家族71名と多数の参加があった。

開会に際し、藤井所長より越冬隊員を支える国内のご家族に対し、お礼とねぎらいの言葉が述べられた。

午前中は、2月に帰国した小達第50次夏隊長の挨拶やご家族の自己紹介等が行われた。午後は小達隊長からの夏隊報告や

事務局からの事務連絡等が行われた。その後、昭和基地と会場を結んで行われたテレビ会議システム交信を利用して、会場に第50次越冬隊員の元気な姿が映し出され、南極との距離を感じさせないひとときに、会場は大いに盛りあがった。

閉会后、別室でテレビ会議システムを利用した隊員とご家族の個別交信が行われた。

極地研カレンダー

10月2日	極地研主催観測隊壮行会
10月8日	総研大入学式（10月入学）
10月8～9日	第29回極域地学シンポジウム
10月16日	運営会議（如水会館）
11月4日	南極OB会主催観測隊壮行会
11月5日	第51次観測隊（昭和基地先遣隊）出発
11月9日	第51次観測隊家族懇談会、南極本部総会、南極本部主催観測隊壮行会
11月10日	「しらせ」出港（晴海ふ頭）第51次観測隊（セールロンダーネ山地調査隊）出発
11月12～13日	第33回極域宇宙空間シンポジウム
11月15日	南極北極ジュニアフォーラム2009
11月17～18日	第32回極域気水圏シンポジウム
11月18～20日	ドームふじ氷床コア国際シンポジウム
11月24日	第51次観測隊（本隊）出発
11月30日	「情報とシステム2009」シンポジウム（コクヨホール）
12月10日	南極研究観測シンポジウム
12月28日	仕事納め
1月4日	仕事始め

Information

人事異動

●平成21年7月31日付け

【転出】

外田恵子 一橋大学教務部研究支援課主任(学術国際交流主担当)
(南極観測センター主任)

●平成21年8月1日付け

【採用】

金子宗一郎 南極観測センター事務職員(南極観測センター特任技術専門員)
中村伸一 南極観測センター技術職員(第51次南極地域観測隊員候補)
(恒栄電設(株))

【転入】

平沼智恵 管理部会計課用度係長
(一橋大学学務部教務課主査大学教育研究開発センター主担当)
三宅真次郎 管理部総務課学術振興係事務職員
(一橋大学法学部・法学研究科事務部教務主担当)

【兼務免】

江連靖幸 管理部会計課課長補佐(管理部会計課用度係長)

●平成21年9月1日付け

【配置換】

田中良昌 研究教育系特任教員(特任助教)
(新領域融合研究センター融合プロジェクト特任研究員)

●平成21年10月1日付け

【採用】

吉田二教 南極観測センター技術職員(第51次南極地域観測隊員候補)
((財)神奈川県予防医学協会)
大市聡 南極観測センター特任技術専門員(第51次南極地域観測隊員候補)
(自営業)
津和佑子 南極観測センター特任技術専門員(第51次南極地域観測隊員候補)
(東京大学大学院生)
増永拓也 南極観測センター特任技術専門員(第51次南極地域観測隊員候補)
(自営業)
木村嘉尚 研究教育系特任教員(特任助手)(第51次南極地域観測隊員候補)
(東京学芸大学大学院生)

【兼務命】

佐藤夏雄 総括副所長・副所長(研究教育担当)(研究教育系教授)
山内恭 副所長(極域情報担当)(研究教育系教授)
白石和行 副所長(極域観測担当)(研究教育系教授)
本吉洋一 極域情報系極域科学資源センター長(研究教育系教授)
山内恭 極域情報系極域データセンター長(研究教育系教授)
白石和行 南極観測センター長(研究教育系教授)
神山孝吉 南極観測センター副センター長(観測担当)(研究教育系教授)
神田啓史 極域観測系北極観測センター長(研究教育系教授)
小島秀康 情報図書室長(研究教育系教授)
山内恭 知的財産室長(研究教育系教授)
渡邊研太郎 国際企画室長(研究教育系教授)
川久保守 広報室長(広報室特任専門員)

近刊紹介

南極資料 Vol.53 No.2

研究論文として尾崎らの自然 VLF 放射強度と銀河雑音電波吸収(CAN)の相関関係を用いた下部電離層電子密度の推定(英文)、報告として、佐藤他の第46次南極地域観測隊気象部門報告、ニュースとして、国立極地研究所による南極地名委員会報告—新たに命名された地名及びこれまでに付与された地名のへボン式によるローマ字表記—の3編を掲載している。

ISSN1347-6483

広報室から

各地で極地研を紹介

今年も夏から秋にかけて各地で展示を行った。まず8月19日と20日、文部科学省旧庁舎6階講堂での「子ども震ヶ関見学デー」。秋に入ってから第51次隊の出発前の9月30日～10月5日、地元立川高島屋1階正面ホールで、「見て、聴いて、触ってみよう不思議な南極 第51次南極地域



氷山の写真を前に剥製たちがずらり

観測隊壮行特別企画展」を開催。新「しらせ」の模型をはじめ、隕石、岩石、ライギョダマシや生物標本の他に、北極の鳥や南極周辺のペンギンなど、普段展示ケースから出ることのない剥製たちがずらりと並び圧巻だった。そして、10月30日～11月3日には、さいたまスーパーアリーナをメイン会場とする第21回生涯学習フェスティバル「まなびピア埼玉2009」に出展した。いずれの会場でも多くの人が訪れ、「なぜ氷から音が出ているの」、「どうして月の隕石だってわかるの」といった質問が相次ぎ、南極観測の活動へ高い関心を寄せていた。

総合研究大学院大学・極域科学専攻コーナー

7月～9月期の主な出来事は入試と学位記授与であった。

7月24日～30日の受付期間において最終的な平成22年度4月入学出願者の数は5年一貫制が1名(生物志望)、博士後期(気水圏志望)が1名の合計2名であった。8月24日～26日にかけて入学者選抜試験及び面接を実施し、9月3日の専攻委員会で可否判定を行った。その結果、5年一貫制受験者は合格としたが、博士後期受験者は不合格という判定結果になり、9月14日の専攻長会議を経て、確定した。なお、統計科学専攻、情報学専攻ともに博士後期の志願者は1名、合格者0名という同じ結果になった。但し、5年一貫制については統計科学2名(定員2名)、情報学3名(定員4名)の合格となっている。極域科学専攻の定員は5年一貫性2名、博士後期1名。今回、定員に満たなかったため、議論の末、平成22年1月18～20日に第2回目の入試を行うことにしている。受験生に心当たりがあれば、お知らせ頂けるとありがたい。9月18日複合科学研究科教授会があり、杉崎彩子への博士(理学)と蓼沼拓也への修士(理学)授与が認められた。杉崎のテーマは"High-resolution optical dating for marine sediments"で光ルミネッセンス法による海底堆積物の高解像度年代決定法の研究、蓼沼のテーマは「南極ドームふじ氷床コアによる最終氷期の温暖化イベントの研究」である。



学位記を手にする杉崎彩子

(澁谷和雄：専攻長)